社会科教育研究会

部　　長　加藤　和昭
研究主任　藤岡　大地
部 員 数　　４５名

１　研究主題

「社会の形成者としての自覚を高めることのできる児童生徒の育成」

２　はじめに

平成２９年に改訂された学習指導要領における社会科の考え方として、中学校社会科の解説には、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」と示されている。グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、日々社会は変化しており、児童生徒は、将来の予測が難しい時代を生きている。そのため、よりよい社会の在り方を考えたとき、一人一人が現状に満足することなく、社会に参画していくことが小学校でも中学校でも必要であると考えた。小牧市社会科教育研究会（以下、「本研究会」と称する）では、このことを実社会で起きている出来事にも目を向け、社会に見られる課題を把握してその解決策を実践しようと考えたり、よりよい社会を形成していこうとしたりする態度を育成することと捉えた。そこで、本研究会では、令和３年度から「社会の形成者としての自覚を高めることができる児童生徒の育成」という研究主題を設け、児童生徒が社会的事象などの意味や意義を考察するだけでなく、自分と社会との関わり方について、自分なりの考えをもちながら、学びを深めていけるような社会科授業の実践を追究してきた。

３　研究の課程

(1)　毎月、小学校部会、中学校部会の各分科会に分かれて、授業実践の報告をしてグループ協議を重ねた。７月・９月に発表に向け準備を行い、１０月に尾張教育研究会愛日支部社会科研究集会にて発表を行った。

(2)　１１月には、小牧南高等学校の「公共」の授業参観を行い、中・高の連携に関して考えを深めた。

４　研究のねらい

(1) 目指す子ども像

社会科の学習内容はもちろんのこと、自分が所属する集団や身近に起きていることに対して、主体的に捉え、自ら社会の形成者としての自覚を高められる児童生徒

(2) 研究の仮説

当事者意識をもって社会的事象を捉え、社会的な見方・考え方を働かせながら深く思考し、選択・判断・表現したり、身近な地域や社会で起きていることに対して触れたりすることで、社会の形成者としての自覚を高めることができるであろう。

(3) 研究の方法

手だて①　児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

児童生徒が社会的事象を自分のこととして受け止めるためには、まず、興味関心や切実感などをもたせることが必要である。そのために、身近で自分とのつながりを感じることができる教材や課題設定を行う。

手だて②　社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面の設定

児童生徒が社会的事象に対する課題や解決策を考える上で、選択・判断・表現できる場面を設定する。その過程で少人数での話し合いや全体での意見交流など、他者との対話的な活動を取り入れることで、多面的・多角的に社会的事象を捉えさせていく。

手だて③　社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめるふり返り活動

社会的事象や課題に対して、自分だったらという視点を児童生徒にもたせ、ふり返りを行う。これを継続的に行うことで、新たな考えを再構築し、社会的事象に対して具体的な考えをもったり、行動を見直したりすることができるか分析する。

5　研究の概要①

(1)　単元名　戦国の世から天下統一へ（９時間完了）

(2)　授業実践前の実態

社会科の授業が好きな児童が多い一方で、社会科の学習に興味や関心が低い児童もいる。社会の形成者としての自覚を高めるためには、まず社会に興味をもたせることが大切である。

(3)　単元の学習目標

本単元では、織田・豊臣の天下統一を手掛かりに、戦国の世が統一されたことを理解させる。また、織田・豊臣それぞれがつくった町の様子を手掛かりに、戦国時代での町づくりの構想を表現させる。戦国時代の学習であるが、児童が当事者意識をもって学習に取り組めるようにしたい。そのために、児童が社会とのつながりを感じる身近な題材を教材の選択、社会的な見方・考え方を働かせて深く思考し、選択・判断・表現する場面の設定、自分の考えをまとめるふり返り活動に取り組んだ。実際の授業では、織田信長が築いた小牧の町を取り上げ、「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」という単元課題を設定することで、社会の形成者としての自覚を高めていくことを狙い、学習を進めていった。

(4)　単元の指導計画（９時間完了）

※本文中における下線部は、下記の手だてのいずれかを示す。

_____　手だて①　児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

_____　手だて②　社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面の設定

.....　手だて③　社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめるふり返り活動

時数	学習課題	学習過程
1	戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、考えよう。	・戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、考える。 ・立場を意識して、自分ならどういう町をつくりたいか、再び考える。
2	信長と秀吉の町づくりについて調べたい事を、出し合おう。	・戦国の世の様子について調べる。 ・信長と秀吉の業績を年表にまとめる。 ・わからないことやさらに調べたいことを出し合う。
3	信長がつくった小牧の町の様子を調べよう。	・信長の拠点の移動について、位置や時間の経過に着目して考える。 ・信長が築いた小牧の町の特徴について調べる。 ・小牧と安土の町の様子を比較して、似ている点を考える。 ・信長が小牧の町づくりについて、こだわっていたことを考える。
4	信長がつくった小牧の町から学んだことをふり返ろう。	・信長がつくった小牧の町についてふり返る。 ・自分ならどういう町をつくりたいか、考える。
5	戦国時代の日本と世界との関わりについて調べよう。	・日本にキリスト教や鉄砲がやってきた時代の様子を調べる。 ・南蛮貿易によって鉄砲やカルタなどがヨーロッパからもたらされたことを理解する。
6	堺の町について、商人の立場から調べよう。	・堺の町の様子について調べる。 ・信長が堺を支配しようとしたとき、自分が堺の商人ならどうするか考える。 ・堺の町についてふり返る。 ・自分ならどういう町をつくりたいか、考える。
7	秀吉がつくった大阪の町について調べよう。	・大阪の町から様々な商人を見つける。 ・大阪の町がどのように栄えたのか考える。 ・秀吉がつくった大阪の町についてふり返る。 ・自分ならどういう町をつくりたいか、考える。

8	秀吉の全国支配について調べよう。	・秀吉が全国をどのように支配していったのかを調べる。 ・秀吉の全国支配についてふり返る。
9	戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、もう一度考えよう。	・これまで学習したことをふり返る。 ・戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか、考える。

6　研究の概要②

(1)　単元名　南アメリカ州　―開発の進展と環境問題―

(2)　授業実践前の実態

社会科の授業において、課題に対して資料を根拠に説明することができるようになってきている。グループ活動でも自分の意見を発信することができるようになってきた。本学級の課題は、当事者意識をもって意見を言える生徒が少ないことである。資料を根拠に社会的事象を説明することはできても、その社会的事象に対して自分がどう思ったかを発信することがまだできていない。

(3)　本時の学習目標

本時では、南アメリカ州にあるアマゾン地域の開発の是非について考えさせ、生徒が社会的事象に対して当事者意識をもって発信できる授業展開を考えた。日本から離れた地域の問題に対して、当事者意識をもって捉えることができる課題、発問を設定し、自分事として捉えた発言を促すことをねらった。また、自分の考えがどの地域に住んでいる人間の立場の意見であるかに着目させ、さらに深く思考し、選択・判断・表現することができる場面を設定した。最後は社会的事象に対する考えを、自分の言葉でふり返りにまとめさせ、社会の形成者としての自覚を高めることを目指していきたい。

(4)　学習過程

第１時　南アメリカ州の地形と気候を捉える

第２時　南アメリカ州の産業を捉える

第３時　南アメリカ州の実状を知った上で、アマゾンの開発について、自分の考えをもつ（本時）

時間	学習指導	指導上の留意点
2	1　本時の課題を確認する アマゾンの開発を進めるべき？ 止めるべき？	
２０	2　グループで意見を共有する。	
２０	3　全体で意見を共有する。	○　生徒の意見をつなげる。 ○　発言の際には自分の言葉で説明するよう指示をする。また、社会的事象の説明だけで終わらず、その事象に対する自分の考えも加えて伝え

		るよう促す。 ○　核心にせまる発言があったときには、適宜グループに返して話し合わせる。
8	4　ふり返りをする。	○　本時を通してもった学習課題に対する自分の考えを、文章でまとめさせる。

7　研究の成果と今後の課題

(1)　研究の成果　小学校

ア　手だて①　児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

本実践では、単元を貫く課題として「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」を設定し、児童に考えさせた。立場を明確にすることで、児童は当事者意識をもって課題を考えることができた。また、第６時では「自分が堺の人々だったら…」という発問を児童に投げかけた。すると、信長の立場での考えに留まらず、堺に住む商人や、堺の町の支援者などの立場からも堺について考えることができた。このように立場を明確にした課題や発問の提示は、多角的に町づくりについて考えることでき、非常に有効な手だてであったと考える。

教材については、信長がつくった小牧の町を教材として取り上げた。例えば、小牧には、土塁の一部や町名に名残が残っており、児童は自分と信長の町づくりのつながりを意識することができた。児童は、校外学習や日常生活で小牧山やその付近をよく訪れており、現在の様子と過去の様子を比べることができた。このように、現在の生活と信長の町づくりの結びつきに気づくことで、戦国時代の町づくりについて当事者意識をもって考えることができたと考える。

イ　手だて②　社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面の設定

課題に対して社会的な見方・考え方を働かせて深く思考するための学習活動を設定した。例えば、第３時では小牧と安土の町の様子の比較することで、川を利用した水運や商業の様子など小牧の町づくりの特徴を捉えることができた。また、堺の町が信長に攻撃されそうになったときの対応法を堺の商人の立場で考え、判断することができた。歴史の学習では初めての事象や多くの人物が登場してくる。苦手な児童にとっては、何か手掛かりがないと、歴史を遠い過去の出来事、他人事として学習してしまう。しかし、社会的な見方・考え方を働かせながら戦国時代の町づくりを追究することで、学習の視点が整理され、思考の方法が明確になったことで、町づくりについて深く思考することができた。非常に有効な手だてであったと考える。

ウ　手だて③　社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめるふり返り活動

本実践に限らず、社会科の授業の中では、学んだことと考えたことの２つの視点でふり返りを書くように指導してきた。さらに、小牧、堺、大阪のそれぞれの町づくりを学んだ後、「戦国時代に、自分ならどういう町をつくりたいか」について考える時間を設定し、ふり返りを蓄積していった。授業の終わりに自分の考えを整理し、表現する活動に継続して取り組むことで、当事者意識をもって戦国時代の町づくりを考えることができた。また、ふり返りを蓄積したことで、児童の考えの変容が見られた。このようにふり返りは児童の学びに有益であるとともに、教師側からは学習の評価につながるものであり、大変有効な手だてであったと考える。

(2)　今後の課題　小学校

ア　手だて①　児童生徒が当事者意識をもつことができるような教材や課題の設定

単元を通して、立場を意識した発問を投げかけてきた。このような発問により多くの児童は当事者意識をもって考えることができたが、学力の低い児童は資料から離れた、根拠のない町づくりを考えているように感じた。このことから、小牧市が進めている「学び合う学び」を有効に取り入れて資料の読み取りを丁寧にさせるとともに、考えの根拠を資料に求めるよう日々指導をしていくことが大切だと感じた。

また、児童が住む小牧を教材として取り扱った。児童の生活経験が異なる中で、信長のつくった小牧と普段の生活とのつながりを意識できた児童と、意識が不十分な児童で理解度に差があると感じた。このことから、児童にとってさらに社会とのつながりを意識できるような適切な教材が必要であると感じた。

イ　手だて②　社会的な見方・考え方を働かせながら、深く思考し、選択・判断・表現することのできる場面の設定

時間の経過を意識するなど、社会的な見方は常に意識して学習を進めた。一方で社会的な考え方については比較や、町づくりと住民の生活を結び付けて考えるなどの活用に留まった。町づくりを比較する際も、多くの児童は川や家の配置など、これまでに学習した視点をもとに比較することができたが、学力の低い児童は、比較することが難しいように感じた。活動に入る前に、比較する視点を共有することが大切だと感じた。社会的な考え方については比較以外にも、分類したり総合したりするなどの考え方もあるため、必要に応じてそのような考え方を活用するのも１つの方法だと考えた。

ウ　手だて③　社会的事象や課題に対する自分の考えをまとめるふり返り活動

ふり返りを蓄積していくことで、児童の考えの変容が見られた。一方で、ふり返りの内容にあまり変容が見られない児童も見られた。これは、自分の考えがうまくまとまらない、どのように書いたらいいのかわからないなどが理由として考えられる。ふり返りをただ書くだけでなく、交流する時間を設けることでよりふり返りの内容が深まったと考える。さらに、小牧

や堺、大阪など町を中心に取り扱ったため、必然的に軍事や商業などに関するふり返りが多くなった。このことから、戦国時代の百姓の生活について学ぶことで、より多面的に戦国時代の町づくりについて学ぶことができたのではないかと感じた。そして、戦国時代の農業や漁業と町づくりの関連を考えさせることも１つの方法だと考える。

(3)　研究の成果　中学校

生徒にとっては遠い地域のアマゾンを教材としたが、開発をとるか環境をとるかで生徒は真剣に考えることができていた。また、「自分の意見は、どこの地域の人の立場の意見なのか」と発問を投げかけることによって、それぞれの立場を明確にすることができた。日本に住む人間としての立場から考えを深め、より自分事として課題に対しての意見を発信することができた。また、環境保全についての意見に留まらず、経済や自分たちの暮らしとのつながりといった視点から持続可能な開発について考えることができた。環境保全の大切さは当然の理解であったが、開発を止めることで自分たちの暮らしに与える影響まで考えが及び、多角的に持続可能な開発について考えることができた。世界の地理を学習する際に、日本との関係や日本への影響を視点として与えることは有効であると実感した。

(4)　今後の課題　中学校

自分事としての意見をもつことはできたが、アマゾンの地域をこれからどうしていくべきかという課題解決や追究の展開には至らなかった。社会的事象を自分事で捉えるだけでは、社会の形成者としての役割を十分に果たせているといえない。この先アマゾンの開発をどうしていくことが最適解なのかを、具体的に考えたり、更に自分たちでアマゾンについて学習を追究したりする授業展開の必要性を感じた。課題に対する解決策や、社会がよりよくなる手だてを考えられるようになり、さらにはその考えを自分の言葉で発信できるようになることで、社会の形成者としての役割を果たすのではないかと考える。本時ではその点まで到達できなかったので、発問の仕方や時間配分を考え直していく必要がある。

8　おわりに

小学校、中学校の実践を通して、児童生徒にとって身近な教材や学習課題は、当事者意識をもたせることにとても有効な手段であると感じた。また、自分だったらどうするかという視点を与えたり、立場をはっきりさせたりすることで、児童生徒が社会的事象に対して自分の意見をもったり、発信したりすることにつながっていった。このようなことから、児童生徒の中で社会の形成者としての自覚が高まったと考える。

これからの課題として、社会的事象に対する児童生徒の意識の差やよりよい社会のあり方を追究する時間の必要性が挙げられる。これを解決していくために、より社会を身近に考えられる教材の開発、他者の意見に触れる機会の確保、さらなる追究のための学習課題の設定や授業展開の工夫が必要であると感じた。児童生徒が社会的事象に触れ、自分の考えをもち、社会の形成者としての自覚を高められるようこれからも実践を続けていきたい。